



秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) 特別展 日本ブックデザイン賞2016展 開催

同時開催：秋山孝の神秘2「点と線」展
主催：秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
協賛：北越紀州製紙株式会社
会期：9月4日(日)～9月24日(土) ※9月10日(土)に授賞式を行います。
会場：秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)

秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8 ※入館料無料
開館時間：11:00am～5:00pm ※火曜日休館
Tel, Fax : 0258-39-1233
日本ブックデザイン賞ウェブサイト：
http://apm-nagaoka.com/bookdesign/
美術館公式HP: http://apm-nagaoka.com

● 審査員 秋山 孝 (審査委員長 多摩美術大学教授/秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) 館長)
大迫修三 (公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会事務局長)
太田徹也 (前武蔵野美術大学、東京藝術大学講師/グラフィックデザイナー)
澤田泰廣 (多摩美術大学教授/グラフィックデザイナー)
竹内オサム (京都造形芸術大学准教授/グラフィックデザイナー)
豊口 協 (長岡造形大学前理事長)
中垣信夫 (ミームデザイン学校代表)



今回で2回目を迎える日本ブックデザイン賞は、

応募総数625点、昨年度同様多くの作品の応募があった。今回の作品募集は、応募部門を整理し、本のジャケットだけをデザインする部門と本全体をデザインする部門に大別した。ブックジャケットは本の判型から、「ブックジャケット・四六判部門」と「ブックジャケット・文庫判部門」に分けた。この2つの部門には課題図書があり、その図書のジャケットをデザインし、印刷したもので応募する。ブックジャケットの部門は昨年の第1回開催時と変更点はほぼない。引き続き課題図書のひとつには、越後長岡藩の家老の家に生れた杉本鍼子著『武士の娘』を設定した。

大きく改編したのは、昨年度までは「私家版カテゴリー」という名称で設置していた、1冊の本全体のデザインに関わる分野である。「ブックデザイン・セルフパブリッシング部門」と「ブックデザイン・パブリッシング部門」と名付け、2つに分類した。出版社がつかない企画、編集、制作の行程をすべて自ら行なった自己出版の本を「セルフパブリッシング部門」とし、対して、「パブリッシング部門」とは、出版社などから既に商業出版している本で応募する部門として分類した。

審査は、どの部門も同様に審査員の投票と議論によつて厳正に行われた。途中、審査員の主張が割れて、白熱した場面もあったが、意欲的で真直前に創作された応募作品に囲まれたら、審査する側も真剣になるのは当然だ。審査を終えて、本とデザインの間には、あらためて本の内容や著者を深く理解し、それをデザインで代弁することだと実感した。そのことを、全国から応募された沢山の作品から、語りかけられたような気がした。

My Best One! 秋山 孝

19世紀後半のフランス、ボードレールは悪の華を出版する。世紀末の都市生活者たちの憂鬱と理想、無気力と倦怠、神への反逆など死の主題をテーマとした。甲賀正彦の作品は、当時の感覚世界をユーモアを込めて風刺的に描いている。裏表紙や袖には、太く黒い線、細い線、点など理解不能な筆跡が記されていて、それがまるでボードレールの鬱屈とした心の叫びのようになっている。その線や点が文字にも思えてくる。見ていると、ボードレールの言葉にならない心の叫びの世界に迷い込んだ感覚に陥る。彼のブックジャケットとイラストレーションには、ぼくを強く惹き付ける目に見えないメタファーが存在している。



一般の部
ブックジャケット・
四六判部門
『悪の華』
甲賀正彦

My Best One! 太田徹也

『高瀬舟』は森鷗外の代表作の一つ。弟殺人の罪で遠島がきまった若い男。そして彼を京都から大阪まで、高瀬舟で護送する役目の中年の小役人。この二人が、月あかりの高瀬川を下りながら交わす奇妙な対話が、パドックスにみちた短編に仕立てられている。悠久に流れる水の動き。舟を打ち連(な)さ(な)み(の)音。このジャケットに描かれたイラストレーションは、うまでもなく眼に見えない無限的な時空の表現に重きをおいている。文庫本のジャケットというミニ空間であっても、おもてうらをイラストレーションで包んだデザインは、屏風絵や障壁面の広大さを思わせる。コンピュータグラフィック万能の現代にこのように個性豊かな作品に出会えたことは、驚きであり喜びである。



学生の部
ブックジャケット・
文庫判部門
『高瀬舟』
関崎祐香子
(長岡造形大学)

My Best One! 澤田泰廣

学生の部のトライアルにとても活気があった。中でもこの作品のアプローチには異端を感じた。僕が若かりし頃、「白鯨」の読破に挑み、知学に溢れた文章に四苦八苦した記憶がある。同時に読書後に感じた何とも言いがたい気だるい静寂と恐怖を今でもちやんと覚えている。そんなシズル感がこのジャケットと出会ったとたんにとんでいった。見ると、ギョラモンド書体でオーソドックスに組まれた題名・作者名他には、直線と円というシンプルな形態が表紙と裏表紙それぞれに構成されているだけである。雄大で、且つ強烈な個性が入り交じる奥深い物語を、削除と圧縮による行為だけで描き切ろうとした作者の決断を大いに評価したい。



学生の部
ブックジャケット・
文庫判部門
『白鯨』
尾高裕希
(多摩美術大学)

My Best One! 竹内オサム

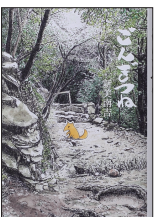
翻訳本のデザインが難しいのは、全く違った文化や環境さらには時代背景さえも異なる作品を、デザインの手で新しい読者に合わせるといふ点だろう。特にこの『マッチ売りの少女』は、誰もが幼少期、絵本という形で出会った作品。その絵本を文庫本(文章主体の作品)として生まれ変わらせるのだから、この作品とは「初めて日本に紹介される翻訳本」として向き合うべきだ。そういう視点で見ると、このデザインは実に秀逸と言える。このデザインの作者は、『マッチ売りの少女』の主人公や情景ではなく、主題である『命の儚さ』を視覚化したかったのだろう。私は、生まれ変わった『マッチ売りの少女』と出会い直しをするなら、こんなデザインがいいと思った。



学生の部
ブックジャケット・
文庫判部門
『マッチ売りの少女』
吳 瑠
(多摩美術大学大学院)

My Best One! 豊口 協

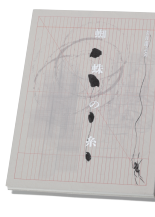
人ときつねの心の触れあい。そんな話が本になる国は、日本しかないだろう。農耕民族の代表みたいな日本人の歴史。その歴史観から生まれてくる動物達との、さまざま触れあいの積み重ねは、すばらしい世界観、時の流れを創りあげてくれている。作品にじっと眼を向けてみよう。すると、さまざま音が聞こえてくるだろう。葉づれの音、何か動く気配、虫の鳴き声。そのすべての情報を、この一枚の表紙の中に表現したいとする作者の心が強く観る人の心をつつ。きつねの表情をよく見てほしい。さびしそうであり悲しそうであり、それでいて何かとほけたような満足感が表現されている。裏表紙の人間の姿との対比は、なかなかのものである。作者の豊かなメッセージが込められた秀作である。



学生の部
ブックジャケット・
四六判部門
『きつね』
大村勇貴
(常葉大学)

My Best One! 中垣信夫

私が評価した所は、本文に使われている戴君のデザインした連綿体のかた文字なのである。そもそも、かな文字は筆でさらさらと縦書きされた草書体が本来の姿である。日本人は、かれこれ800年もの長い間、柔らかなその文字を書き続けてきた。そのかな文字は正方形とは無縁である。所が日本で活字が使われるようになり、無理に正方形の中に封じ込められてしまった。しかしそれによつて、かなが持つ言葉の息遣いが失われてしまった。文字とは言葉の形にする記号である。人が話す息遣いを如何に再現出来るかが重要だ。私は年齢とともに、漢字が混じりの日本独特の文字使いは何と魅力的な文化なのだと思います。始めてみる。



学生の部
ブックデザイン・
セルフパブリッシング部門
『蜘蛛の糸』
戴 勇強
(東京造形大学大学院)